

今回のトレーニングドッグ



シャイン

セラピードッグへの道

セラピードッグの
基本トレーニング

今回のテーマ: **セラピー練習[さんぽ係]**

やってみよう!
Let's try!!

目標 車イスの斜め前(両サイド)・杖を持った人の隣(両サイド)を一定の間隔を保って歩く。

車イス

Step1 ベストな位置に導く



ハンドターゲットでドッグをベストな位置に導きます。
※利用者様とアイコンタクトが取れる位置の距離感を覚えさせるため、できた瞬間にほめることが大切です。
ドッグの大きさによって、利用者様・車イスとの距離は異なります。

Step2 トレーナーの脚側を歩く



利用者様役(車イス)・ドッグ・トレーナー(自分)の順で横に並んで歩きます。利用者様役には自操してもらいます。
※トレーナー(自分)だけでなく、利用者様役の方もリードを与え、両者からもらえることを覚えさせます。

Step3 トレーナーが車イスを押す



トレーナー(自分)が車イスを押して、ドッグが車イスの斜め前を歩くように指示しながら散歩します。

杖

Step1 トレーナーの脚側を歩く



利用者様役(杖)・ドッグ・トレーナーの順で横に並んで歩きます。

Step2 トレーナーは 利用者様の背後を歩く



トレーナー(自分)はリードを持ったまま、利用者様役の背後に少しずつ移動し、ハンドターゲットを示して、ドッグは利用者様役の脚側を歩くように指示します。



これはNG

利用者さんの行く手を阻むシャイン。



※実際のセラピーでは、利用者様が杖でドッグの背中をさすったり、尻尾を踏んだりされることがあります。そのため、トレーニングの際、ドッグにそういう経験をさせて「こわくない」ということを認識させています。



最初はシングルリードで練習し、できるようになったら実際のセラピーと同様にダブルリードで練習します。ドッグセラピー事業部では、ドッグが利用者様の左右どちら側でも歩けるようにトレーニングしています。
なお、ドッグは、すぐにできなくて当たり前です。その子によって、できるまでの時間も異なります。シャインの場合は約半年かけて練習しましたので、気長にトレーニングを続けてください。

☆トレーニング☆

ドッグセラピー事業部のセラピードッグとセラピストは、毎週1回、笠木恵子先生のトレーニングを受けています。
笠木恵子先生
My Dog Training School 主宰 家庭犬訓練士

(お問い合わせ)

有限会社かりゆし ドッグセラピー事業部

〒701-1333 岡山県岡山市北区立田587番地
TEL.086-905-0111(直通) FAX.086-287-8261
E-mail. dog_therapy@ikenaga-group.jp

http://www.therapydog.jp



燦々 Sansan

有限会社かりゆし
ドッグセラピー事業部 会報誌

Vol. 22 / 春号
2016年

Contents

- 砂田教授インタビュー
- コラム:ドッグセラピーの現場から
- おしらせ:オレンジカフェ
- トレーニング:さんぽ係



今後の認知症研究では予防と生活習慣、接し方が鍵に。

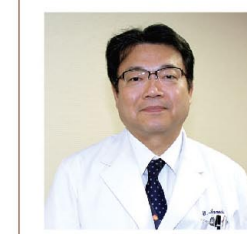
——認知症の現状と課題、さらに、今後の国の方針などについて教えていただけますか。

砂田氏 2012年の疫学調査で、認知症高齢者の人数が全国で約462万人と発表されました。認知症患者の数は予想以上に増えています。予備軍(MCI/軽度認知障害)約400万人を含めれば「認知症800万人時代」に突入したと思っていいでしょう。国も危機感を持って対策を考えています。

2013年に英国・ロンドンで「G8認知症サミット」が開かれました。キャメロン首相が先進国共通の課題として初めて認知症を取り上げ、国際的協働を促す主旨の共同声明が発表されました。2014年には東京で「認知症サミット日本後継イベント」が開かれ、認知症になっても住み慣れた環境で自分らしい生活が送れる地域づくりを目指す指針「新オレンジプラン」が打ち出されました。その中に、各自治体が認知症の初期集中支援チームを設置し、推進するという施策が含まれています。倉敷市でも平成28年4月、医療機関をなかなか受診されない高齢者の自宅を訪ねて評価し、医療につなぐ取り組みが始まりました。

認知症は、初期段階で見つけて医療に結びつけることが大切。なぜなら今の医学でも、認知症の進行を遅らせることはできても完治は難しいからです。そのため今後は予防が課題になると思います。現にイギリスでは、認知症対策として国民の生活習慣の見直しや改善に取り組んだ結果、認知症の発症率が低下してきています。つまり高血圧や糖尿病といった生活習慣病が認知症の重要な危険因子であり、中年期から食生活や喫煙・飲酒

interview



川崎医科大学神経内科学
砂田 芳秀 教授・副学長
認知症疾患医療センター長

日本神経学会神経内科専門医・指導医
日本認知症学会専門医・指導医
日本内科学会認定内科医・指導医
日本頭痛学会認定医・専門医

などの生活習慣を改善したり、糖尿病であれば薬でコントロールしたりすることで認知症は予防できることが分かってきました。エクササイズ(運動)も大切です。難しい運動でなくともウォーキングで十分。現在、総社市は予防に役立てようと「いきいき百歳体操」に取り組んでいます。また国立長寿医療センターは「コグニサイズ※」を積極的に広めています。歩きながら頭を使う作業をする「コグニサイズ」は認知症の予防効果が高いことが分かっています。

——ドッグたちは認知症患者様と一緒に散歩します。認知症患者様にとっても運動は効果的でしょうか。

砂田氏 運動は良いと思います。一人では歩けなくても犬と一緒に歩けるということもあるでしょう。今、多くの研究者は「運動すると筋肉から何らかの作用を持つ物質が出て、それが脳にもいい影響を与えるのではないか」という可能性について考えています。筋肉から分泌される「マイオカイン」と総称される物質の中の何かが脳に届いて働くと良い効果を示すと考えられています。この物質が何かは、今まさに認知症研究における重要なテーマの一つになっています。

—ドッグセラピー事業部は「オレンジカフェ(認知症カフェ)」に参加しています。こちらへの期待はどうでしょう。砂田氏 認知症になるとかく閉じこもりがちになり、地域のコミュニティから遠ざかってしまいます。「認知症と知られたくない」というご家族も多く、それが症状を悪くする要因にもなっています。だから認知症の方が参加でき、介護する人もストレスを発散できる場として「認知症カフェ」は重要だと思います。真庭市では、認知症サポーターのキャラバンメイトの方たちが積極的に「認知症カフェ」を手伝っておられます。認知症の方やご家族が笑顔で喜ばれるとサポーターの方々もやりがいを感じ「自分たちも元気をもらえる」と両方が良い影響を受けておられるようです。

—ドッグセラピー事業部がドッグセラピーで参加している「オレンジカフェ」も、地域のボランティアの方が主体となり地域づくりをかねて運営されています。利用者様の中には「犬がいるなら」と来てくださり、通所サービスにつながった方もいらっしゃいます。オレンジカフェ以外にも「青空万歩」というウォーキング大会も開いています。これは途中でクイズも行っています。砂田氏 それは、すごくいい取り組みですね。

—ところで、認知症の病型によって、ドッグセラピーの向き不向きが考えられるでしょうか。

砂田氏 認知症患者全体の中でアルツハイマー型は60~70%ぐらいでしょう。原因によって症状が異なり、関わり方やアプローチも違ってきます。認知症のタイプの違いをよく理解した上で、その方に必要な薬やサポート、サービスを考えることは大事だと思いますね。

僕は実際のドッグセラピーを見ていませんが、アルツハイマー型の方には、すごく合うんじゃないかという気がしています。アルツハイマー型の患者様は基本的に、自分と他者との関係を求めているタイプだと、僕は思います。こちらが質問した際、返答に困ると付き添いのご家族のほうを振り返る、そういう振り返り反応が見られるのがアルツハイマー型の特徴です。一方、前頭側頭型の方は、まずそんなことはしません。また他者に対する無関心が認められるので、ドッグに対しても無関心なのではないかと思うのですが…。

—私たちは病型別ではなく、BPSD(周辺症状)やドッグとの相性に応じてセラピーの方法を選んでいきます。ドッグとの相性が悪い場合、前頭側頭型の可能性もあるでしょうか。

砂田氏 そういう観点から検証してみてもいいかもしれないですね。ただし病型の正確な診断は難しい。日本認知症

学会が老年精神医学会、いずれかの試験に合格した「認知症専門医」の診断を受けて欲しいと思います。

—昨年の「川崎認知症セミナー」で、認知症患者様への対応の仕方を学ぶ内容の講演がありました。

砂田氏 患者様と同じ目線の高さで、正面から分かりやすい言葉で話しかけるなど、認知症患者様に対する接し方について、当病院の看護師・医師をはじめ数多くの職員が学びました。接し方を変えることにより、興奮して介護に抵抗していた認知症患者様が穏やかになられます。その様子を見て特に看護師からの反響が大きかったですね。近年、認知症患者様が身体疾患によって認知症専門外の病棟に入院されるケースが増えています。そのため当病院では「認知症ラウンド※」に取り組み始め、さらに高齢者に医療を提供するときには、ベースに認知症をお持ちの可能性を常に考えながら対応するようにしています。

—認知症の患者様とのコミュニケーションの方法は言語だけではないということでしょうか。

砂田氏 ケアする側が「認知症の方とはコミュニケーションが取れない、何を言っても分かっていない」と思っていることがあります。だけど実際は、そうではありません。コミュニケーションの手段が言語だけではないことを知ることはとても大切だと思いますね。

当病院では介護用人形を使っています。「この子をケアしてあげたい」という気持ちが働くと患者様は穏やかな状態になられます。それによって患者様の健康面にも、介護負担軽減にもメリットがあります。人形でも良い影響がありますからね。僕も一度ドッグセラピーの現場を見てみたいと思います。

ありがとうございました。

※ コグニサイズ…英語のcognition(認知)とexercise(運動)を組み合わせた造語。国立長寿医療研究センターが開発した、運動と認知課題(計算やしりとりなど)を組み合わせた「認知症予防を目的とした取り組み」の総称。

※ 認知症ラウンド…認知症看護認定看護師や地域連携室、精神科医、作業療法士など認知症専門職の多職種チームが認知症患者を観察し、具体的な対応や専門的な意見・対策などを検討するカンファレンスや、看護職員の認知看護に関する相談対応などを行なう。



column

コラム ドッグセラピーの現場から

vol. 7

役割感を引き出す係②

【さんぽ係】

対象症例

このような状態が見られる方に実施します。

- 徘徊 ●暴言・暴力 ●介護拒否 ●昼夜逆転

さんぽ行為で期待できるリハビリ内容

- 下肢筋力回復・向上 ●持久力/耐久力の増加
- 発語量の増加 ●記憶力低下防止 ●コミュニケーション能力向上
- 問題行動の減少など

注意点

- 歩行中の転倒を防ぐ。
- リードに余裕をもたせる。必ずダブルリードで行なう。利用者様の顔を見る余裕をドッグに与えるため、リードにゆとりを持たせる。また、ドッグが利用者様の前ではなく横を歩くように指示し、利用者様と適度な距離感を保てるように配慮する。必ずダブルリードにして、セラピスト(自分)は短めに持つ。
- 進行方向の安全を確保 歩行を妨げる物体や、画びょうなどケガにつながる危険物が床に落ちていないか確認すること。また、刻々と変わる周囲の状況・変化を先読みし、他の人が近づいて来たらドッグに「集中する」指示を出すなど、細かく対応する。

ドッグに必要なトレーニング

- ウォーキングマナー(歩行訓練)
- ケインウォークマナー(杖歩行訓練)
- ホイルチェアマナー(歩行機/車椅子 歩行訓練)
- その他(リードを引っ張られる訓練、アクシデントに対応する訓練など)



おしらせ

いきがいライフたかまつ

「おかやまオレンジカフェ(認知症カフェ)」

毎月2回 ドッグセラピー(集団)に参加してみませんか?

ドッグセラピー事業部は、特別養護老人ホーム いきがいライフたかまつ(社会福祉法人義風会)の「オレンジカフェ(認知症カフェ)」で月2回・各20分程度のドッグセラピー(集団)を実施しています。これは、岡山市の「認知症施策の指針(岡山市版オレンジプラン)」に基づく民間委託事業です。参加者様には、笑顔や会話が増えるなど好ましい変化がたくさん見受けられます。

開催日時

毎月第2・4水曜 13時~15時
※ドッグセラピーは13時30分頃から20分程度

喫茶協力

「ひまわりの会」(高松地域ボランティア団体)

メニュー

ドリンク(お菓子付き)各100円

場所

いきがいライフたかまつ 1階・地域交流ホール
(岡山市北区立田586-1/tel.086-287-8880)

参加申し込み先

介護高齢者ドッグセラピー普及協会
E-mail info@therapydog.jp

※見学、ご家族の付き添いも遠慮なくご連絡ください。